

歌なきものの歌

源氏鶏太



新潮文庫

うた
歌なきものの歌
うた



定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 118 Q

昭和五十年三月三十日 発行
昭和五十三年十月三十日 七刷

著 者
源 氏 鶏 太

発 行 者
佐 藤 亮 一

発 行 所
株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

◎ 印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Keita Genji 1975 Printed in Japan

新 潮 文 庫

歌なきものの歌

源 氏 鶏 太 著



新 潮 社 版

歌なきものの歌

部員十二名

一

自宅からそのまま得意先をまわり小高次郎が会社に戻って来たのは、午後二時過ぎであった。

「やア、お帰り」

隣席の高井英吉がいった。

「ああ」

小高次郎は、^{うなず}頷いておいて煙草に火を点けた。

二人共二十七歳で、いっしょに入社したのである。仕事の上ではライバル同士ということになっているが、しかし、同時に二人は、いい飲み友達でもあった。恐らく月給の大半をそっちにまわしているのでなかったろうか。どちらもまだ独身なのである。遊ぶことが面白くてならないし、かといって、それについて誰からも文句をいわれる心配のない、人生において最も幸せな一時期
と云ってよかった。

「どうだった？」

高井英吉がいった。

「ダメだねえ」

小高次郎は、答えて、

「どこもかもひどい金詰りで、A産業なんか、今月末が危ないらしい」

「危ない？」

「手形なんだ」

「すると、うちへの影響は？」

「大丈夫だ。先月、部長にいわれて強引に貰っておいたから」

「よかったな」

「そうなんだ」

「まア、うちの社は、今のところ、そういう心配がないからいいな」

「あったら困る」

「そりゃアお互いさまだよ」

小高次郎は、煙草を灰皿の中にもみ消してから、

「おや？」

と、はじめて気がついたように机の上の片隅の白い物を見た。

四つに折りたたんだハンカチが置いてあったのである。小高次郎は、それを手に取った。フチにシシユウのしてある女物のハンカチだった。真新しい物ではないが、よく洗濯がしてあって、

アイロンが利いている。

「どうしたんだ」

高井英吉がいった。

「こんなところにハンカチが置いてあった」

「君のでなかったのかい？」

「女物だよ」

「見せろ」

高井英吉は、ハンカチを受け取って、

「なるほど、女物だ。しかし、けさ僕が出勤して来たときからもうそこにあったような気がする」

「誰か置き忘れたのだろうか」

「おい、いい匂いがしているぜ」

高井英吉は、小高次郎にハンカチを還した。小高次郎は、その匂いをかいだ。仄かに香水の匂いが漂うている。清潔ないい匂いだった。そのとき、小高次郎は、これとおんなじ匂いをどこかでかいだような気がした。が、それがどこであって、いつであつたかは、思い出せなかった。

小高次郎は、あらためてそのハンカチをひろげて見た。あるいは舶来物の高価な品であつたかも知わからない。一口にいえば、可憐な女を想わせるようなハンカチであつた。そして、そのことはそのまま、このハンカチの持主がそういう女であるような……。

「けさから置いてあつたんだって？」

「そのような気がしている」

小高次郎は、首を傾けた。そして、もう一度、その匂いをかぎ、いつ、どこで、誰からこれとおんなじ匂いをかいだのか思い出そうとした。しかし、思い出せそうで、徒労に終わった。

「そう、僕もたしかにけさからそこにあったのを見たような気がしますよ」

向いの席の小山田直造がいった。小山田直造は、もう五十歳を越していて、仕事のミスはいまだにときどき繰り返しているが、人柄はよかった。お人好しとっていいかも。が、子でくさんで、生活がラクでないしかった。好きな酒もめったに飲めないでいるようなのである。小高次郎と高井英吉が四年前に入社したとき、この小山田直造にいろいろと仕事のことをおしえて貰った。それが今大いに役立っている。その恩義を感じて、二人は、月に一度ぐらい飲みに行くとき誘うことにしていた。そういう場合、小山田直造は、欣然きんぜんとしてついてくる。

「誰かこのハンカチに心当りがありませんかね」

経理部は、部長以下十三人である。誰もさっきからハンカチの一件について聞いていたに違いなかった。そして、興味を持っているようだった。しかし、心当りがあるという者はいなかった。

「芝木さんのと違う？」

「いいえ」

「では、米沢さんのでは？」

「違いますわ」

「すると、早野さん？」

頭を横に振った。十三人のうち、この三人だけが女だったのである。しかし、その三人共自分の持物でないといったのだ。

（妙なことだ）

小高次郎は、思った。何でもないこともわからない。しかし、薄気味悪い気持がしないでなかった。

「ひょっとすると」

小山田直造がいった。

「どういふことですか」

「社内の誰かがかねてから小高君に思いを寄せていて、早朝に出勤して来て、そういう真似をしたのかもわかりませんよ」

人人は、声を上げて笑った。小高次郎は、苦笑した。

「それこそ、何のためにですか」

「思いを口でいえないからですよ」

「では、手紙をくれたらいいでしょう？」

「それも恥ずかしい」

「バカバカしい」

「と、おっしゃいますがね、小高君。女ごころって、そういうものですよ」

「今頃の女が、ですか」

「まア、僕なんかには今頃の若い女のころってよくわかりませんが、どうもそんな気がしますね。だから」

「だから？」

「この社内の女のうちの誰か一人が小高君に密ひそかな思いを寄せていると思っておくべきですよ」

「しかし、その誰かが誰か、どうしたらわかるんですか」

「すべては、神さまの思召おぼしめしです」

人人は、また笑った。小高次郎は、たった一枚のハンカチのためにバカにされたような気がした。しかし、かといって、むきに憤おこる気にもなれなかった。もし、小山田直造のいう通り、誰か社内の女の一人が自分に思いを寄せているためにこんな真似をしたのであったら迷惑な話だなど思った。そういう思わせ振りは、あんまり好きでなかった。

「いっそ、捨ててしまおうか」

小高次郎は、高井英吉にいった。

「さア、それはどうかな」

「しかし……」

「別に邪魔になるものでなし、当分の間、君の机の引出しの中に入れておけよ」

「そんなことをしたら毎日気になってならなくなる」

「それだっていいじゃアないか」

高井英吉は、笑いをふくんだ顔で鷹揚にいった。

「こいつ、他人事だと思つて」

「おお、そうよ」

小高次郎は、まだ迷っていた。彼がそのハンカチをチリカゴの中に放り込みかねているのは、やはりこの匂いをいつかどこかでかいだような気がするという思いのせいであつたかも知れない。

——部長の船田大明は、さっきから黙つてこの容子を見ていた。自分の部下なのである、と思う。船田大明の仕事の酷しさには定評がある。しかし、叱られても、嘸鳴りつけられても、とにかく自分について来てくれている。

（みんないい奴ばかりなのだ）

今は、しん底からそう思っている。

（しかし、この連中は、まだ何にも知らないのだ）

それを思うと、船田大明は、口許を噛みしめたくてくるのであつた。

（だから俺は、何としてもこの連中をまもつてやらねばならぬ）

船田大明は、あらためてそう決心すると、

「小高君」

と、呼んだ。

小高次郎は、まだ捨てかねているハンカチを持ったまま部長席の前に立った。

「急だが今夜、僕がみんなにおごりたいんだ」

「本当ですか、部長」

「すこし話しておきたいことがあるのだ。みんなの都合を聞いておいてくれないか」

「わかりました」

「なるべくなら全員に出席して貰いたいんだが」

「そのようにいます」

「そのハンカチ」

船田大明は、そこでちょっと間をおいて、

「誰か持主が現われるまで、君の机の引出しの中にしまっておくことだな」と、口調をやわらげていった。

二

その夜、経理部の連中がよく行く新宿の小料理屋の二階へ船田大明をのぞく十二人の部員たちが集まったのは、午後六時半頃であった。幸いに船田大明の希望した通り一人の不参者もなかった。船田大明もいっしょにくる予定であったのだが出しなに社長から呼ばれたのである。

「僕は、都合ですこし遅れるかも知からない。僕に遠慮をしないで、先に飲んでいてくれたまえ」

船田大明は、そっくり残して、社長室の方へ行った。

午後七時まで待った。

「部長もああおっしゃっていたのだし、先に飲んでいましょうか」

小高次郎が人人の顔を見まわすようにしていった。

「いいねえ」

高井英吉がすぐに応じた。仕事の上でも、遊びの上でも、たいてい二人の呼吸は合っていた。といって、二人の容貌や性格までが似ている訳でなかった。小高次郎を精悍せいかんということにすれば、高井英吉の方は、温厚とっていいだろう。顔つきも、小高次郎は、鋭角的だが、高井英吉は、どちらかといえば円顔である。他の部員たちは、二人を親友だと信じていた。いや、他の部員たち以上に、二人の方がそうであったかも。

二人の言葉に、

「ああ、そうしよう」

と、塩井次雄がいった。

塩井次雄は、部員の中のトップであった。しかし、手腕力量という点では、部長の船田大明に遠く及ばない。そのことは本人も認めている筈であった。

早速、酒とビールが取り寄せられた。隅の席にかたまった三人の女も結構飲んでいた。小高次郎と高井英吉が並び、その横に小山田直造がいた。小山田直造は、いつでもそうしたがるのである。さっきから黙り込んでいた部員たちも酒が入ってすこし陽気になって来た。

「部長の話って、何だろう？」

小高次郎がいった。

「それだよ、さっきから僕も考えていたところだ」

高井英吉がいった。

一年に二、三回は、このようにしておごってくれる部長なのである。しかし、今夜の場合は急であり、なるべく全員に出て貰いたいし、すこし話したいことがある、といったのだ。前例のないことだといっている。

「どうも僕は、妙な胸騒ぎがするんだよ」

小高次郎がビールを飲みながらいった。

「胸騒ぎ？」

高井英吉が見返していった。

「たとえば部長が急に会社を辞めることになったとか」

「バカな。あの部長がいなくなったたらうちの会社なんか、じきにつぶれてしまうぞ」

「僕だって、そう思っているさ。しかし、僕は、かねてから部長をたった資本金八千万円の会社の経理部長にしておくのは惜しいと思っている」

「わかる」

「あれほどの人なら資本金百億円の会社の経理部長だって立派につとまる」

「そう」

「だからどこかよその大会社へ引き抜かれて行くという可能性だってあるだろう？」

「あるが、それは困る」

「いくら困るといったって、これは部長自身の問題だからな」

「しかし、僕は、そんな部長でないと信じている」

「どういう意味だ」

「あの部長は、僕たちを捨てて自分だけがいい餌えさに飛びついていくような人でないということだ」

「そうですとも」

横から小山田直造がいった。さっきからチャンスとばかりに人の二倍ぐらいは飲んでいられるらしいのである。

「では、話というのは、いったい何だろうか」

「それがわかれば文句がない。しかし、やがて部長が来たらすべてわかるだろうよ」

「そうですとも」

また、小山田直造がいった、

「それより小高さん、あんた、あのハンカチをどうするつもりですか」

「ハンカチ……」

小高次郎は、せっかく忘れていたのに、厭いやなことを思い出させられたと思った。同時に、あの香水の匂いは、いつ、どこで、誰からかいだのであろうか、とも。たしかに以前にそういうことがあったような気がしている。それを思い出せぬもどかしさを感じながら小高次郎は、ビールを